

令和5年度

劇場・音楽堂等活性化・ネットワーク強化事業

(地域の中核劇場・音楽堂等活性化)

成果報告書

団 体 名	公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団	
施 設 名	大分県立総合文化センター (iichiko 総合文化センター)	
助 成 対 象 活 動 名	人材養成事業	
内 定 額 ( 総 額 )	3,867	(千円)
	公 演 事 業	0 (千円)
	人 材 養 成 事 業	3,867 (千円)
	普 及 啓 発 事 業	0 (千円)

## 1. 事業概要

### (2) 令和5年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数(人)	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	ホール付属 ジュニアオーケストラ 結成15周年 特別育成事業	育成：通年 合宿：9月16日-18日 体験イベント：2月11日	iiichiko グランシアタ・ジュニアオーケストラ、 大分県立芸術文化短期大学学生、 川瀬麻由美、高田喜夫、ほか	目標値	団員在籍 70
		iiichiko SpaceBe、 県立芸術文化短大、 大分県庁正庁ホール		実績値	団員在籍 63名、 イベント 参加者 45名

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

## 2. 自己評価

### (1) 妥当性

#### 自己評価

ミッション（社会的役割等）・ビジョンや地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

社会的役割(ミッション)と地域特性を踏まえて事業を組み立て、予定通りに事業を進めた。

#### <社会的役割・ビジョン・地域特性の把握>

公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団(以下、当財団)は、社会的役割(ミッション)として、芸術文化のリテラシーを備えた感性・創造性豊かな人材の育成・交流を通じて、地域社会の活性化への貢献を掲げている。センターに隣接する県立美術館との一体的な運営や、県内に大分県立芸術文化短期大学(以下、「芸短大」)、県立芸術緑丘高校という芸術教育機関が存在するという特性を活かし、クラシック音楽を通して子どもたちの豊かな感性と創造性を育むとともに、県の重点政策である「創造県おおいた」推進の一助を担った。

#### <事業の適切な組み立てと予定通りの事業推進>

令和5年度は結成15周年の節目であり、結成1年目、5年目、10年目の定期演奏会の指揮をお願いした下野竜也氏に15周年の特別育成の指導をしていただき、団員の集中力、技能、アンサンブル力のレベルアップに取り組んだ。また、北部九州ジュニアオーケストラミュージックキャンプ(他県3団体との合同合宿)を実施し、団員同士の結束を深めるとともに、他県の同世代の楽団と交流することで、新たな仲間から刺激を受ける機会を設けた。加えて、2月に楽器体験のイベントを開催し、活動の周知と新規団員の確保に努めた。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

以下のとおり、事業の文化的、社会的、経済的意義が継続して認められる。

#### <文化的意義>

芸短大の教授等による通常練習だけでなく、国内トップレベルの指揮者からの特別指導により、地方では通常学べない、質の高いレッスンが実現できた。これまでこうした取り組みを続けてきた結果、卒団生の中にはNHK交響楽団や東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団など、プロのオーケストラに採用される人材も輩出しており、大分の音楽文化の一翼を担っている。

#### <社会的意義>

小学生から大学生までの団員が年間31回の活動を行い、交流・切磋琢磨し、さらに本年度は6年振りとなる合宿を実施する中で、学校教育とは異なる経験や居場所を提供することができた。

また楽器体験会では、団員が同年代の子どもたちに対して手ほどきをするなど、自主性と社会性を高めることができた。また、上述のプロオーケストラで活躍する卒団生の存在は現団員のキャリア育成の意識向上につながっている。

#### <経済的意義>

結成から15年を経て、ジュニアオーケストラの講師や当センターのアウトリーチ登録アーティストを務め、地元の大分でプロの演奏家として活動する卒団生も出てきており、大分の音楽業界を担う人材の輩出に寄与している。

## (2) 有効性

### 自己評価

目標を達成したか。

#### 当初設定の目標

ホールが改修工事に入るため、主催・貸館事業ができない分、ジュニアオーケストラの育成にこれまで以上に集中して取り組み、センター再開後の大幅なレベルアップを実現したい。このため、感性・創造性の豊かな子どもたちが様々な分野で活躍・交流できる場をつくり、地域社会の活性化を目指すとともに、結成 15 周年の節目の年として、特別外部講師を招聘し、各パートのさらなる実力アップを目指す。また、利用休止中のホールに代わって、隣接する県立美術館のアトリウムを使用したミニコンサートを積極的に開催し、演奏機会の確保を図る。

#### <目標①> オーケストラの練習環境を整え、団員を増やす。

指標① オーケストラの活動回数を年間 30 回とする。

実績① 練習会場の制約もあるなか、31 回の活動を行った。(達成)

指標② オーケストラの所属団員数をアカデミッククラス(初心者向け)も含め 70 名以上とする。

実績② 3 月時点で、団員 49 人、アカデミー生 14 人、合計 63 人。(未達成)

2 月の楽器体験会(参加 45 人)以降、入団の問合せが多くなっている。

	団員	アカデミー生	合計
年度当初	49 人	8 人	57 人
3 月時点	49 人	14 人	63 人

団員は年度途中 1 名退団したが、途中入団も 1 名いたため、団員数としては現状維持  
アカデミー生は楽器体験会の成果により、年度途中で 6 名増加した

#### <目標②> 定期演奏会以外にミニコンサートなどの発表機会を設ける。

指標③ 定期演奏会以外の演奏を年間 3 回以上行う。

実績③ 当センターのアトリウムプラザや大分県立美術館でのミニコンサートを 3 回実施したほか、夏の合同合宿では熊本県立劇場の舞台上で演奏した。(達成)

#### <目標③> 北部九州ジュニアオーケストラミュージックキャンプ(合同合宿)を実施し、団員同士の結束を深めるとともに、他県の同世代の楽団と交流することで、新たな仲間から刺激を受ける。

指標④ 団員アンケートにおいて『合同合宿に参加することで団員同士の結束が深まった』との回答を全体の 90%以上とする。

実績④ 『結束が深まった』との回答は 87.1%であったが(未達成)、その他、『団内の友人が増えた』、『年齢やパートを越えて交流できた』などといった回答が得られた。

6 年振りとなる宿泊を伴う他県の楽団との交流により、団員同士の結束が深まった。さらに他団体の楽員とも、パートごとでのリハーサルを組み、切磋琢磨し、最終日に総勢 127 人の仲間で演奏することで、演奏技能や向上心について、多くの刺激が得られた。

#### <目標④> 活動に取り組むことで、子どもたちの知識や教養を高める。

指標⑤ 団員アンケートにおいて『知識や教養が高まった』との回答を全体の 90%以上とする。

実績⑤ 団員全員が高まったと回答したため、100%を達成した。(達成)

地元の大学講師のほか、国内トップレベルの指揮者からの指導により知識や教養だけでなく、感性や技術も高まった。加えて、小学生から大学生までの異なる年代が共に同じ目標に向かって活動したり、コンサートプログラムの曲目解説を自分たちで執筆することで、演奏技術以外の部分でも知識や協調性を学ぶ機会となった。

#### <まとめ>

令和 5 年度事業においては、上記①～④の 4 つの目標と①～⑤の 5 つの指標を掲げて運営に取り組み、そのうち指標①③⑤の 3 つで指標を達成した。未達成の指標②においては、コロナで減少した団員数が徐々に増えてきており、令和 3 年度より続けてきた楽器体験会の成果として、楽器体験会→アカデミー生の増→団員数確保のサイクルが出来つつある。また、指標④においては令和 6 年度も継続して合宿を実施するため、達成を目指していきたい。

### (3) 効率性

#### 自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業期間は適切で、当初の計画通りに進んだと評価できる。

年間の日程は、4月から始まり毎月第2・第4日曜日を練習日とし、翌年3月下旬の第15回定期演奏会を目標に当初の年間計画どおり、年間計22回の練習を行った。

夏に合同合宿を実施したほか、大分県立美術館でのミニコンサートも開催するなど、取り組むべき楽曲が多く、仕上げるまでに例年よりも時間を要したが、年度後半の12月、2月、3月に下野竜也氏による計5回の指揮者レッスンなどを経て、団員全員で飛躍的に上達し、公演では極めてレベルの高いパフォーマンスが実現した。

4月9日	新年度オリエンテーション
8月27日	大分県立美術館でのミニコンサート 1
9月16-18日	北部九州ジュニアオーケストラ・ミュージックキャンプ〔合同合宿〕
12月3日	大分県立美術館でのミニコンサート 2
12月17日	下野竜也氏レッスン
2月4日	下野竜也氏レッスン
2月11日	ジュニアオーケストラ・フェスティバル〔楽器体験会〕
3月20日	大分県立美術館でのミニコンサート 3
3月22-24日	下野竜也氏レッスン

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費は適切で、当初の計画通りに進んだと評価できる。

合宿実施によるバス代や講師スタッフの宿泊費など発生したが、チラシをはじめとする印刷物において、安価なネット印刷を利用するなど、経費節減に努めた。また、レンタル楽譜や特殊楽器、ピアノ調律が必要な楽曲の選曲がなかったことや、賛助出演者についても卒団生や芸短大の学生を起用することにより、事業費を抑えることができた。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

芸短大との協定や九州各県のジュニアオーケストラと構築したネットワーク、オーケストラ結成 15 周年という蓄積してきた運営ノウハウを最大限に活用し、芸術性・独創性の高い企画を実現し、発信できた。

県内唯一のジュニアオーケストラで、団員は県内から集まっている。芸短大という本県の芸術教育機関を最大限に活用し、芸術監督・音楽監督は芸短大音楽科の教授陣が務めているほか、各パートにおいても、それぞれ県内トップクラスの講師陣を配置し、充実した環境でオーケストラの運営を行っている。

新規団員の募集については、募集チラシ・ポスターを県内各所の学校や公共施設、協賛企業の各支店に全県配布したほか、新聞広告や館内掲出の巨大サイズの垂幕でも告知を行っている。令和3年度からは、さらに毎年楽器体験を実施し、広報に努めている。

このような本事業を実施することにより、音楽堂として芸術文化の人材を養成する役割を果たすとともに、本県の文化拠点としての機能を最大限に発揮している。

初の県外公演に向け練習をするいいちこグランシアタ・ジュニアオーケストラ



初の県外公演 高まる士気

いいちこグランシアタ・ジュニアオーケストラ初の県外公演となる第15回定期演奏会が3月24日午後4時から、福岡市の福岡市コンサートホール（アークロス福岡）で開かれる。

いいちこグランシアタ付属のジュニアオーケストラとして2009年に結成。小学5年から21歳まで49人が在籍し、芸術監督の川瀬麻由美（県立芸術文化短大教授）、音楽監督の高田喜夫（同准教授）らの指導で腕と感性を磨いている。指揮者にNHK交響楽団正指揮者で国内外で幅広く活躍する下野竜也を迎え、モーツァルト「コピュルティメント」へ長調 K. 138、グリーグ「ペールギュント」よりの組曲、チャイコフスキー「交響曲第5番 ホ短調 Op. 64」を奏でる。下野は定期演奏会で初回、5回、10回と指揮をしてきた。15年かけ、素晴らしいチームワークが生まれてきたと感じている。多

くの人に聴いていただき、団員が自分たちで考え表現する名曲の演奏を楽しんでほしい」と話す。

メンバーは他県のオーケストラと合同公演をするなどし、本番に備えてきた。コンサートマスターの高祖のぞみさん（17）は「初の県外での公演にドキドキワクワクしている。これまでやってきた全てをのせた演奏にしたい」と張り切っている。

チケットは全席自由で千円、高校生以下500円、未就学児（4歳以上）入場無料。問い合わせは、いいちこ総合文化センター（097・533・4004）まで。（高橋桂子）

いいちこグランシアタ・ジュニアオーケストラ 来月、福岡市で定期演奏会



小中学生、団員と演奏体験

大分市でフェス

「いいちこグランシアタ・ジュニアオーケストラフェスティバル」が11日、大分市のいいちこ総合文化センターであった。ワークショップ形式で音楽に親しんでもらおうと、県芸術文化スポーツ振興財団が2021年から開催している。経験者コースには小中学生18人が参加。パ

打楽器の体験をする初心者コースの参加者たち（いいちこ総合文化センター）

経験者コースに参加した志岐那乃さん（9）は「緊張したけど、先生方が優しく教えてくれた、楽しく演奏できた」と話していた。（高橋桂子）

## 自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

県内の実演芸術の振興、文化芸術の発展に資するため、ジュニアオーケストラでは令和3年度より毎年、ワークショップ形式での楽器体験および団員と共に演奏するオーケストラ体験イベントを行い、令和5年度は45名が参加。ジュニアオーケストラの活動を知ってもらう機会となった。

また、ジュニアオーケストラでは、アカデミーコースという団員になるための初心者コースを運営し、個別レッスン、楽器の貸与など、参加しやすい環境を整備することで、クラシック音楽を学ぶ子どもたちの裾野の拡大に努めている。

ジュニアオーケストラの芸術監督・音楽監督は芸短大の教授が務めており、また各パートの指導は同学科の講師が務めている。加えて活動には同学科の学生15名が賛助として練習に参加している。賛助出演の学生にとっても、日本を代表する指揮者・下野竜也氏のレッスンに参加することで、音楽に対して一切の妥協をしないプロの芸術家としての姿勢や心構えなど、多くの刺激を受ける貴重な経験となった。

下野氏は令和5年10月からNHK交響楽団の正指揮者に就任するなど、国内トップレベルの指揮者であり、これまでも第1回・第5回・第10回といった節目の定期演奏会に招聘している。本県のジュニアオーケストラとは15年間のつながりがあり、その下野氏からも「回を重ねるごとにオーケストラとしてまとまりができていくと実感する」との言葉をいただくなど、ジュニアオーケストラの実力は着実にレベルアップしている。

第15回という節目を迎えた定期演奏会（助成対象外）は、初の県外開催となったが、アンケートでは「弦が美しい、ホルンが見事、パーカッションが上手、指揮に一生懸命ついていこうとするところがいい、よいアンサンブルとハーモニーでそれぞれの曲をよく表現していた」、ずっと見てきている人からは「年々上達して充実してきている、進化が素晴らしい」、「次はグランシアタに行ってみたい」等の声が多数寄せられた。

以上のように、ジュニアオーケストラの団員の育成のみならず、これから楽器を始めてみたいと考えている県内の子どもたちの学びや、実演芸術家を目指す県内学生の技術向上、県内外のジュニアオーケストラファンづくりなど、大分の実演技術の振興とともに、文化芸術の広がり、発展につながっている。

## (5) 持続性

### 自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

#### <事業運営、ネットワークの構築>

ジュニアオーケストラは、県内の芸術文化の教育機関である芸短大音楽科と連携し、芸術監督・音楽監督、各パートの講師を依頼し、年度末3月の定期演奏会(助成対象外)を目指して、団員が4月から練習を積み上げるという教育プログラム。他方、ジュニアオーケストラ側からは団員が芸短大音楽科に進学するなど、当センターと芸短大とが相まって、県内の芸術文化の人材育成(教育)に取り組んでいる。令和5年度ジュニアオーケストラの在籍団員は49名で、そのうち、芸短大音楽科の学生は4名、県立芸術緑丘高校音楽科の学生は8名である。今後とも、これら教育機関の協力を得ながら、コロナ禍からの回復傾向が見えてきた団員数の増加を図りたい。

北部九州ジュニアオーケストラミュージックキャンプにおいては、大分・福岡・熊本・佐世保の4館の事務局で、月に1度、オンラインによる定期的なミーティングを行い、事業運営に関する意見交換や相談を重ね、強固なネットワークが構築できた。こうしたネットワークを活かして、今後のジュニアオーケストラのレベルアップを図りたい。

#### <経営戦略>

ジュニアオーケストラの経営・運営については、音楽科を有する県立大学(芸短大)と連携し、オーケストラ・楽器の指導を芸短大の教授・講師に依頼している。また、プロとして活躍する指揮者や演奏家を招聘し、団員の技能を高めるとともに、ジュニアオーケストラとしてのレベルアップを図り、併せてジュニアオーケストラの対外的な広報にも効果を上げている。

#### <人事戦略>

ジュニアオーケストラの事務運営は、団員・保護者、講師との正確な連絡、ホール所有楽器や楽譜の管理、過年度の講師や演奏曲目の把握などが必要で、経験を積んだベテラン職員(事業担当副課長)が経験の浅い職員(事業担当事務員)に知識・経験・ノウハウを伝えていく体制を組み、人員配置による組織運営に取り組んでいる。

#### <まとめ>

経営面や人事面、事業運営について、上記に留意して取り組み、ジュニアオーケストラのレベルアップを図るとともに、広報や楽器演奏体験・オーケストラ参加体験のワークショップ型イベントを開催して団員増を図り、PDCAサイクルを意識し確認を行っていくことで、事業と組織運営の持続的発展を図っていく。